



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第一話

日本は今どのような子育て・教育環境にあるのか

私は本年の6月1日をもって、創業したICE教室（幼児教室、私立専門塾）の運営を塾の最大手である栄光グループにお任せすることに致しました。教育に関しては「教育顧問」としての場をいただいております。

この際、ICEが、今までにどのような子育て・教育を心がけて来たか、今の日本の子育て・教育がどのような成果をもたらしているのか、そこにある問題を、どのように克服したらよいのかを皆様と考えていきたいと思っております。楽で楽しい子育てをするにはどのようなことを心掛ければよいのか、いつから始めればよいのかをテーマにしていきたいと思っております。

この談話は、ICEの内部生の保護者に読んでいただきたいのです。特にお父様は皆様お忙しい、教室側から直接お話する機会が少ないのです。お父様の理解と協力が無ければ、子育てや教育が上手く行くはずがないのです。私立幼稚園、小学校の両親面接でも、父親が決め手と言っても過言ではありません。受験準備は、母親は先行し父親が後を追うパターンが多いですが、早期から父親が子育てに積極的に参加されることが大切です。

受験のノウハウに直接つながることは、この教育談話ではなく、内部セミナー等でお話することになります。双方向性で話を進めたいと思っておりますので、是非皆様の質問とご意見を頂きたいと思っております。

尚、ここで述べていることは、ICE教室の主宰者であった者が感じたことであり、厳密なデータに基づく研究の成果ではないことをお許し頂きたいと願います。

幼児教室を運営するにあたって思ったこと

0歳～18歳までの教室を運営して先ず気がついたことは、教室ができることは、中学以上の子どもの場合は、どちらかという、学習面での指導が中心である反面、年齢が小さければ小さいほど、教室の指導と家庭での対応により「本質的に子どもが変容していく」という事実です。変容していくというより、子どもが生まれながらに持っている美質（自ら伸びようとするDNAの計画）を引き出して行く、といった方が適切でしょう。それだけに、教室が提供する教育や子育て情報の質には大きな責任を伴います。間違えた教育を押し付

けると、子どもの発達を損ねる場合もあるのです。「教育の陥穽（^{かんせい}落とし穴の意）」と言って、よかれと思ってやって、逆に、子どもの本来の成長を妨げることがあるのです。

ICEは、将来の子どもの健全な成育に繋がることのみを行うこととし、信頼性のあるメソッドを取り入れ「伸びる子に育てる」ことを目標に掲げました。日本で幼児教室にモンテッソーリ・メソッドを導入したのもICEが日本で最初であったと記憶しています。モンテッソーリ・メソッドは、今から40年前、私がアメリカの大学院に留学していたころに遭遇した教育法で、100年の間世界各地で実践され、その有効性が実証されてきました。

ICEでは、このモンテッソーリ教育をベースにしながらか、その後に研究・実践が進んだ世界の乳幼児教育法を取り入れ、最新脳科学の知見を活用して、「伸びる子に育てる」各種のコースを提供しています。

子育ては、適切なタイミングで、ポイントを押さえておけば、「楽で楽しい子育て」が出来る、ボタンの掛け違えをすれば、「悪戦苦闘の子育て」となります。0歳から、適正な子育てをすることが大切ですので、タイトルを「0歳からの教育」といたしました。

日本の子育て・教育の成果

日本の若者の社会的不適応が急増している現状はやがてこの国を衰退に向かわせる深刻な事態です。しかし社会はその深刻さにあまり気がついていない。それが問題です。

現状を把握し、原因を分析し、対策を講じることが喫緊の課題です。

幼稚園受験、小学校受験の両親面接でも、『今いろいろな事件がニュース等で報じられますが、気がかりなことはありませんか』等の質問がされます。『それに対してはどのような対策（又は子育て）をされていますか』と更に聞かれ、家庭の世界観、価値観、子育て観、教育観などが問われます。

では、日本の現状を整理したいと思います。

現在日本を蝕んでいる社会現象

社会的に不適応の若者が増えている日本の現実

1. 不登校 12万人
*2013年文部省調査 対象：小中学生
2. 引きこもり 160万人以上、稀に外出する程度のケース（準引きこもり）を含めると300万人以上存在する。この数は、日本の国力を弱めるに充分といえる。
*NHK福祉ネットワークによる2005年度数値
3. いじめ（小学校） 約12万件
*2013年文部省調査
日本のような陰湿ないじめは外国には存在しないとも言われている。

4. このほかに、ニート、拒食症、緘黙（かんもく）、意味不明の殺人、境界性人格障害など、若者の社会的不適応の現象は広範囲に渡り、そのほとんどが日本で突出して多い。
5. 「老人の孤独死」等、社会全体における「無縁社会」化が浮き彫りにされてきている。日本は、今までは「子育ての上手な国民」、日本の社会構造を「相互依存社会」と世界に評価されてきたが、各世代においても孤独の度合いが高まり、「社会的孤立の状況」が最も高い国とされている。2005年 OECD 調査結果で「友人、同僚、その他宗教・スポーツ・文化グループの人と全くつきあわない、めったにつき合わない」と答えた人が加盟20ヶ国中最も多かったのが日本であった。
6. 日本人の平均寿命は世界のトップクラス（女性は2年連続世界トップ）です。出生数は過去最少を記録しています。日本では、少子化の影響もあって、十五歳以下の子どもの人口がペット（犬と猫の合計）の総数を下回りました。ペット愛好家のことを悪く言うと、私も生き辛くなってしまうますが、ペットは、飼育者が自分を無条件で癒して欲しいという「自己愛」の表現でもあるのです。子育て・教育においても、愛をもって子どもに接するよりも、親の自己愛の表現である場合もあるのです。少し方向性がおかしくなっていました。
7. 上記のように際立った社会的不適応の底流には、日本の若者全体の傾向性があります。こちらの方の数が多くて、むしろ問題といえます。外国人ジャーナリストの言葉を借りてお話ししましょう。

マイケル・ジーレンジガー（ドイツ人のジャーナリスト） 『ひきこもりの国』（光文社）より要約。日本、韓国、中国で活躍したドイツ人で、帰国に際し、本を上梓しました。日本人への警告とみてもよいです。

1. 引きこもりは日本特有の現象、不登校も同様、いじめもこの様に陰湿なものは他の国にはない。
2. 日本の若者は突出して、感動、意欲を持っていない。全世界とは言わない、韓国、中国と比較してみたまえ。
3. 韓国、中国の若者の方が日本の若者より学ぶことに熱心。（早晚日本は韓国や中国に追い越される）
4. 日本の若者は若い内から、厭世観に取りつかれている。
5. 日本の母子には愛着の形成が希薄
6. 日本の親子には本音の会話が少ない。（親の顔色を見ている）

*愛着とは、乳幼児期に特定個人（母親または母に代わる人）に対して持つ特別な感情。

「無条件に、十分に、永遠に愛されている」という実感。

*愛着はエリクソンの言っている「基本的信頼」と同義語と思ってよい。

上記の特色は何れも、乳幼児期に母（またはそれに準ずる人、祖母等）と「基本的信頼関係」の構築に失敗した場合の症候群です。

一口で言えば、「日本は、世界有数の、人を産み、人を育てるのが下手な国民になってしまった」ということです。それはやがて国力を弱め、日本を世界の弱小国に貶める可能性が高いのです。既にそのシナリオが動き始めているのです。20年に渡る経済停滞や財政破たんの問題もありますが、子育て・教育問題も喫緊の課題として取り組まなくてはならないのだと思います。

- * 社会学的に見ても、日本の現象は注目すべきであり、先日韓国で行われたセラプレイの学会でも、やがて、中国や韓国にも日本と同じ症候が表れるかどうかの議論もあったようです。しかし韓国では、教会を中心とする地域社会が出来上がっており、若い人が常時参画していて、同じ条件ではないようです。
- * 不条理な殺人について最初に時代に警鐘を鳴らしたのはノーベル賞受賞作家アルベール・カミュと記憶しています。1942年に『異邦人』を発表した。主人公ムルソーは劣悪な環境の乳児院、孤児院で育った。母の死を知らせる電報が養老院から届く。葬儀のために養老院を訪れるが、何の感情も感じない。普段と変わらない生活を送り、ガールフレンドと海水浴に出かけ、「太陽がまぶしかった」という理由だけで人を射殺してしまう。取り調べでも、訳の分からないことばかり口走る。「こんな、エイリアン（異邦人）がこれから出てきますよ」という警鐘であり、読者にはある意味、衝撃的で新鮮だった。
- * 三島由紀夫が、「今から20年後には、子どもが犯罪に巻き込まれたり、子ども自身が犯罪を起こすときが来る」と予言して、約20年後の1989年に、宮崎某による幼女連続殺害事件が起きた。4人の幼女の首を絞め、手足を切断し、血を飲み、骨を食べたとされる。こうしたいちいちを、「夢の中でやったような感じがしている」と言いながら、あっけらかんとしゃべっている。検察側は「わいせつ事件」として主張し、公判のどこにも、この時代と社会が生んだ出来事であったという視点は見当たらなかった。
- * 宮崎事件の8年後神戸連続児童殺傷事件が起きた。14歳の少年が2名を殺し、3名に重軽傷を負わせた。注目すべきは、短い犯行声明の中に「ボク」という表現を21回使用していることであり、「透明な存在であるボク」と何回も綴っている。「透明な存在であるボクを作り出した義務教育と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れていない」。少年は、ボクという、自分自身を実感出来ずに苦しんでいたと推量される。
- * 宮崎事件も、神戸の事件も、犯人には、自我の発達、自意識の発達が低く、実存感の薄い中での、犯行であった。
- * 2006年の佐世保少女殺害事件で裁判長を務めた小松氏は、今回の同じ佐世保少女殺人事件について読売新聞のインタビューに応じ、「共感性や人を思いやる気持ちが不十分であったのだろう」と答えている。
- * 上記のような事件はその後加速して増加し、日常茶飯事になってしまった。

以上